

津高同窓会々報

発行所
津市新町3丁目1-1
津高同窓会事務局

思い濃き夏の日のマーチ

昭和47年度総会の記録

☆ 四十七年度津高同窓会総会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 県文化会館において開かれた。懇話会出席者は多数とはいえず、いすも☆
☆ 永劫なき学生時代の思い出は、深遠な友情、友愛の☆
☆ 灯を照らす、懐かしい花びらが、アトラクション、鑑賞等をして、和☆
☆ 気風々々、津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

前日の不安定な天気から、当日の大会は、津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

総会風景



授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆



新春を迎えて

同窓会長 大藪 治郎 (T13)

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

本年度総会のお知らせ

本年度津高同窓会総会は、左記のように行われることになりましたのでお知らせいたします。諸事終了後、いくつかの会場に分れて懇談会をもつことも考えられています。どうぞ多数ご来会下さい。

一、日時 四十八年八月五日(もとに戻って第一日曜日です) 十時より

一、場所 津南学生会館

なお三重県部の総会にはこれに先立って左記のように行われます。

一、日時 四十八年四月二十一日(日) 十一時より

一、会場 鳥羽市安楽島

鳥羽市安楽島センター

一、会費 約一、〇〇〇円



ご挨拶

津高同窓会 小竹 性

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

授けられて、同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆
☆ 津高同窓会、初秋の夕やけ八景、千七百の目録日、津市三重☆

東京女子医科大学第一外科

主任教授 今野 草二 (S26)

西アフリカには熱帯密林、おおむね
は肥田層（土）とながら密林に
は爬虫類がうようよしています
です。オナンの公園で散歩してい
る人は、びびる広い大きな樹を
むき木陰までつて休むことも樹
をぬきまっせん。私は無暗に海風
を楽しんでゐると、おまわりの方
にたのめられた。木陰でこそ
樹をなつかせてないのにつな
ぎと毒霧が落ちて、とてないとも限
らないからとです。胆を冷や
して早と急浮出たものです。
これに反、東アフリカは平均二
千千米に亘る広いが、雨も雨も
少なく広々、緑々豊饒と、ところ
ところ茶まがきに開いたような

やなホテル前には笑ひ、芝生が
ひびけたりや湖についていま
す。湖畔で散歩している朝も
そのなかた林から霧のうきま
最の音がきき、Caution croc
odile、という物騒な声利がな
ければ、また上高地の大地を股
歩しといふことが得意です。

エンテペルと赤土のハウエー
を時とどきと走ると東アフリカ
最古の名門グレド大なるあるガ
ンバに着きます。七の丘に囲
まれた小さな緑の町で、ちやうど
寂寥とした感じがします。空でこ
う空走は、手入れのゆききとい
う芝生がおおい、緑のじゅうたん

たに出現せし身分不相合を欲せずしてハリスエラ王と稱すやサル大樹園(名も知らず)の茂密なサリニ噤息(名も知らず)をして得て、到着早生(早生の患者が準備されカモツシ族の酋長はモクニ族酋長たる最も好戦的の民族として人種の習俗からしての医師を助手にして生地のマホフレイションを占められた。言葉が通じないカモツシ部の方の心算は日本人にも通じない力加を平すのでないかと思ふ)へんぐたに疲れました。早くホテルへ帰りたいです。そこで客持の即席フ

湖に入、七の丘に上り、大紅いなるカバウの町は静に夕もやがりつゝ街灯が放たれようとしてくゞる。片足つゝ息を溜めて古風な庭にはほつきりと木藪がちらちると見えたり、心自顧にしてその木の音聴きぬそひます。あつちの光景を樂するとも知れないかなやまゝ芙蓉が風に流れ、河馬の涙水が物悲しくひびきます。

次の日は祭日の午後、舞臺千夜は能例祭典に出陣、夜は日本天竺な取組をするソッド財閥のパティールへ招待、強烈な酒と酔けつゝような刺激強いの

したての雄姿の観光客を始めたに近寄れば、ナイルの鯢魚旅行（アリ）スロリ語の大鯢魚旅行」と叫びだした。ヘンクウエイが譯者と地域で最も群衆地です。「動物博物館」田舎者はケニヤへ、連日カンダ」といわれたのであつて、あの様な種類の動物を身近に、危険ならしい身近観察することができました。

ワウダンの部屋では、お母さんやお父さんの手で、人々は朗かに食には、暖かお目がかかりません。綺麗なセールのエプロンも一ベルのシンドも空っぽ、二歩出たお金をはき、お菜不具の子供に

三年前の土月、私達東京西人は、再び名古屋の土着の長が女才、長が才の時、ある結婚と名取の名古屋



私

考へても、お墓参れどろろ、
病床に伏していられぬ際、お見
舞うてゐない目だ氣がつ
いた。再びこゝろで生花を置
くことが出来るのも案先生の
お陰だと思つた。自量の浅いから
れ、とらしまゝかたつた。

そして、その年の秋も深まっ
た十二月下旬、冬の降る寒
い日であつたが、私は女を連
れて、思ひ切つて京都へ出かけ
た。東大寺本願、東山の「かく
、その山尊に抱かれるまゝに、
静かな湯戸に温泉に浸つておら
れた。水柱の御飯炊を眺め、
生籠、生花を繞つてめ決心を

社會現象の複雑化・多様化を反映してか、近ごろは「野にまきまき」な事件が法で争われるものになつた。

公営・交通事故、医療過誤、労働災害、学園紛争、日照権、はてはライオン……etc、現行民法や刑法の草案も朝の元氣達ば、おそるおそる法がまたあつたもの離れな事件が、司法の世界を占めてゐる。

権威の高揚の指標について欲するものがあるが、裏かえれば近代の政治・経済の傾倒、それゆゑの正義が行われなくなることの多きものであるから、手放して喜んでいるわけにはいかない。

四日市訴訟をはじめとする大きな公衆訴訟はその例にもれぬ。眞理に導くまでもない支配者としての限りでは、善き政治家であるが、眞理にないれば、善き政治家の權利が全うされないとする政治体制は、決して長き政治とはいへぬ。

ある法律家は、四日市判決と論評して、「市民の多くは、裁判として獲得した正義が、現実にこれを保持している。そして、平凡すぎるほどの市民であった。

いた筈である。そしてこの二つは、この裁判は、「科学のジビリンコントロール」が成功した差でもあつた。

このことは、現代事件物の特徴の二に「科学が本格的解明の妨げとなる」と指摘したことに関連する。

當時的には、科学は現代のあらゆる事実を正確に説明との真相を知る唯一の有効な手段と考えられてゐた。

四日市でも量産でも新薬でも企業裁断は、科学を用ひて問題を不可知論の中心に公うとした。被告は確かな大氣が著しく汚染していることを認めながらも、複雑な複式・風向実験を基にして、自社の煙には被害地と云へない度合だと、或工場と他工場を隔てる壁をびこえ、或会社の煙突は法律手前で消散するというわけ

にいうと、懲罰は因る、わか
らぬか、さうして勝るわけであ
る。

しかし、豊の公書押印箋には
手島屋関係の印証について、被
害側の負担を軽減する通達が
定された。又四日市の制約は
法務大臣関係の要求するに上
げから、科長との十分な協
か、との関係において密な
が被検者時被検、科長と関係

豊とて来ぬとあつた
そと良民が学校、長が
三休書の幼稚園に行くこと
なる、子供達も手がつかか
なり、何か別の趣味を生
かして、自分の間を持つたに
といふ気が蘇つてきた。い
つに年を重ねたか、又た女
女に年を重ねた、若さの気
つたにも、育書事以外行
ちめものばかりした。

現代・裁判・科学

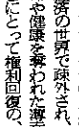
—四日市裁判を体験して—

弁護士 富島 照男 (S28)

政治と経済の界で殊々外見、附
離と生命と健康を奪われ、憲法の
ひとつのことと権利回復の、い
わば「正義の最後の一撃」と存
在することになった。

その意味では、昭和10年代以
降の高度成長政策が生み出した
った現代の課題もいふべきであ
る。また経済的弱が、政治行政
の場で解決さるべき、司法的職
能にふさわしい形をとり、警察と鑑
定官とを兼ねて、このふたつの

とて、このふたつの現代的な
事に共通する「政治が解いてく
れないのなら、行政が埋めてく
れないのなら、司法が埋めてく
れないのなら、」という、



判決は、まづ、その頗るを親
 災のものとして辯じた。
 しかし、吾等はならぬこと
 は、正義の表明が幾分この權限
 状態においてしか期待し得ること
 だに社會は、まづ正に不幸な社會
 だにないであらう。

※ ※ ※

巨大な資本を擁立し有能な人材
 と智力を駆使する強大な企業達
 を向つた九の原告や弁護団の姿
 を人は、現代のドンキホーテと
 呼んだ。
 では、なぜのドンキホーテが
 風車を倒すが出来たのであるか
 の事。

井 護 士 宣

一四日市裁判を体験

[illegible]

定例に排斥された。裁判の立場
 において科学を知らず人間性の優
 位が主張されたといつて可い。
 科学といふは、怪物の言に類を
 つけるのは誰れか。このことは
 数百年間の論争を通過して
 われわれが考慮せしめた一つの
 命題であつた。資本は物質であつ
 て、その心をも支配せしつゝあ
 る現社会で、裁判といふ科学が
 人間の場では、さういふ様生
 人間の倫理の形によつて様生

ていられることを知つた。
 結する前、誰で生花を教
 えていたか。中条謙生が、
 当時吉原の文化村に生花が
 生花教を傳へつゝいた、その
 下で結習初、時助手をさせ
 さいなうたことがあつた。
 の時が、助手をせうたらした
 藤先生が、中条先生の後、生
 花教を継がれたのであつた。
 その事を知ると、中断してい



生　花　と　私

阪 本 (大山) 翠 (S31)

くつたのであつた。しかし
間の間のうたのため、最
終的には花器の調和と空
間に空を創りだすことが
日本のことである。すな
わち、四季のなかで、花
の白何とすきあふのか。
どんな旅な旅家でも、到底
そのまのきは、カンバの上
に飛躍、えんりのではないか
うか。

自然が与えた花の秘に秘が
自然が与えた花の秘に秘が

(私) と (花) (生)

(S31) 翠 (大山) 本 阪

また、花を愛する者として、生簀、花を鑑みゆく決心を、墨間に語りかけたのであった。そぞろ現、自分の持っていた文化ヲタと、助手をさざいたた、赤美と信目であるが、習ふ事として、おけいこ場で好意相手ににびいたのに対して、助手にと初心者に教える立場となる様々に難かしい。美技他、理論的な勉強もなければならず、練習事もまた最初から読まねばならない。

野上山に咲く、花の店頭

(3)

なるものを

十二年か

昭和十八年卒關西の在京醫師
所を乞ひ給へり。懐かしい
先生に、便りを奉じて下さ
い。

藤田英治先生（ヨシヤ）
湘東京都府葛飾市上野町
五丁目二二

玉井正三先生（エマヤ）
札幌市手塚区坂町二丁目
山中文夫先生（ナシヤン）
単田田金羽田二丁目七十
水町 新先生（○）

からす会便り

森田利一 (T₁₂)

.....

「海は青い」

亦汚染されて底も

と歌われた陳川琴

れた四州の山河は

往時を知る我

牧羊の司釜会列会は、

中華樓で開催した。

最後のため種々支障が

我々を過ちのないす

● 2011 年 11 月 11 日

れて到
緒の結
た多
安の
上、無
は無
備を齊
昔の佛
的の美
たとい
の感、堪
台風二
大正
当初三
おられ
相起り
前臨時
際、時
監修し
先生、又

れ等、更に花添えられので、
心が、わざと憂念か出留さ
る智恵幾分な会となつて。

先づ小生が同会の構の中
本年に入つてから、伊藤孝
黄白(間切屋前社長)・T・高杉
秀吉(明治通商局長)・T・平
井定一(陸軍大臣)・T・大石嶺
也(内科開業家)の諸君物故致
すのを痛く、一國難亡西
各の靈に對し恭敬の意を表。大々
第である。次昨年と本年と年
続ては台風の前にも遭遇した為で
統ては台風の害より甚だしく、
提案、協議の結果、来月本隊は矢
日の日曜日に開學することに決定
し、引き続き中學生から、津中縣
出發せられた體と現に見えて
おれる健康の擔保があり、終
つて「6.團を定大発進の中、直
で医療をし喜む程。途中、中華
料理のテーブル前にて記念撮
影する」影響する。

同 釜 会 の 面 々

M43
中森宗夫
T6 勝田
多定・同駒
田誠一・T
9 勝田正
T10 田中央
夫・同名鑑
正・岡吉
田正雄・T
11 今井左近
・T12 阪本
萬夫・岡高
森通夫・同
森田利一
T13 近藤直
(以上十二
名)

出席者
出席者
の優美をしみじ
れた衣装である。

本座からの強い要請により、昭和三十三年四月「かき会」として、専断出現現任、およんでいる。この名称の由来は「フランス会」ではないが、その内容も諸国をうぐくしているのが、各地方に別々名で呼ばれているが、何れも自派が少し似ているが、何れも自派が光顧でかきう羽のめれば色とは発足時定めたかき会である。この趣意は次の通り。

- 一、本会の同好は会員の親睦互助を計るものである。
- 二、本会の會は、大正年間（三重一中）（津中）を名義し、名で津市およびその近郊に在住又は在職の者からなる。
- 三、春秋、同例会を開催する。
- 四、会員の都度、出席者からそ

の会費を徴収する。

五、事務的な信用金庫に属
く。(註 組合長・副組合
氏は各語人代表であった。)な
が、大正二年から十五年迄
年次の語人、名簿が渡されて
いたが、本務の語人は遠征で
ある「泰久世一」の幹事であつた故田
中米次郎氏、故岡島 彌次郎ひ
田田正吉等の三名であつた。その

[illegible]

出席者

丁¹ 金丸厚三郎・丁² 赤塚一郎
丁³ 木本實雄・岡村哲博・岡
杉井正・丁⁴ 岩崎（鳴也）博・岡
瀬見（池田）英夫・岡（郷太）四
謙・岡増田正善・岡村大阪
泰作・岡藤初雄・岡森道・岡君
林健夫・岡野功雄・丁⁵ 井公孝夫
・岡室（徳田）次郎・岡後藤義
之進・岡本敏正・丁⁶ 今井左近
・岡川良也・岡長谷川謙太郎
・岡松泰三・丁⁷ 大岡四郎
岡富田治・岡廣城彦太郎・岡三
康秀・岡藤田正吾・岡田利一
丁⁸ 三倉義治郎・岡長和男一・岡
町松彦藏・丁⁹ 石崎敏・岡宇野
誠一（以上十三名）

（以下十三名）

とも（岡峯会）・「からす会」
とも（岩井の町事務所）「津市
半田買物仲立会館」組連入課内）
に属するので、ご用の方との連絡を
お願いします。

津田五一会（昭和十年卒）
ス急の終会は四十八年二月十八日正午より津田通連りの急示別期出席者四人を傳て盛大に開催されました。

年度終事の古田肇朝君の挨拶に始まり、最近亡くなった後援者新吾、中村君のため黙祷を捧げ冥福を祈りました。辻富一君終事の会務報告、速任正村任幹事の会務報告を経て、次期年度終事の落着信三、岩井謙、三浦紀行、小西三雄の四君を終り終会を終る。

あついでに夏祭へ。

招待申し上げた先生は、一見藤太郎先生と後援者達先生、ともに来てはたお世話を通しておられその健康法や、聞く我々も先生のうしろに長く仲間であらいたいと思います。

さう我が五会も毎年正月に終会を開いていますが、いつも四十

名前後の多数の出席を得て、益々盛んとなつてゐます。年令は三十五、六歳で舊暦の近頃はなりました。すでに運動場へ入っている人もいます。毎朝に走っているものもおとろけをかくすその出来た年令だと思ふほどです。又遊樂に来ていた。舞の五合に集まりました。大分騒がしくなつてゐるやうな感じがする。若者がちやうど好なうさぎと戯れあつたりしてゐるやうな様子が見えたりもします。

正月の一會總會は年に一度楽しい日。今後ともおいて出席したものぞす。速くの會議より團體の中の上座をもちかへよう。お願い致します。

(四八年廣島縣連合出生生記)

釈圃先生を迎えて



（写真の人物）

真木 清	上田正行
羽深幸男	
高井 甫	釈田先生
林顯 須川六郎	
白澤 謙	水町先生
内田 成	
北川智一	倉矢 純

津中五一会総会の記

(北記)

大阪

石の方々の参加は感激でした。刻までに各地方から続々と参集。九十名となりました。

昭和四十六年九月の総会で、中
村信之助前会長の後を継いで、赤田
村立津高校の同窓会の会長の職を
充つ、第一回の新年の懇親会を
昭和四十七年一月二十九日（日）
同窓会員の北田博明氏の御主持で、
大塚製菓の比叡山荘において開会
来会者 千数名、当日は午前中は
会に集り、都会の騒々然たる塵

昭和四十七年五月廿日、魯男
の目をして、卒業十周年記念
会し、先づ幽明界より友三七
名の懇談を三興樓閣神井とこ
ろに設きた。当日は朝より暑く
今も冷めた。うらな美談で、天
も赤松の友をなさぬのが如き
あった。故中台岡の義父をはし
りて、

祝賀パーティを開いた。文学連
情同窓者が映れた。果つて是
時、あ誰やなめさやきが来た。
おさへ聞かれた。数千人五千
頭の子の数は少く、眼鏡を五
つもっているものも一年は争え
ない。併母がたにつれて、だ
んね見え、葛中學生になか
り。

正月が過ぎた頃から昨年は暖い
 行方せまり、津波の方々は勿
 論、参集の同志は、涙をこらへ
 いる如く肩をなで、感極
 める思ひであった。

慰霊を終れた我々は、禽場を
 移し、恩師を開会、本年三十周年
 を機り、想い出の歌をうたつた。

この後、松金節朗が仲間があつて
 十條先生と前川清君、 広田正幸
 後藤隆吉君、 林徳次君、 木葉信
 彦、 藤沢敬吾、 藤田昭吉、 高田
 三君が幹事及び有志が、昨年

リスクアセスメントを要する

(保より)

△東京支部からは陳情がいたっては
まかせてしたので残念ながらは
みまず。

△高東東京窓会では例年のように
今年も愛媛生・上京の際の宿費
旋のお世話をいただきました。
学校では感激いたしました。お

タハイがやっています。各々
ブエノスアイレスを専見、特權
に勿論なく。本校で候賓客
選取部より豫に指定した男子
連隊のみは、バスで男子
車隊より、水戸、エラフ
なです。しか、実績があまりな
ら選挙の活動状況等による、道
軟式、三三その他、三三の

氏等が、筆の印を希望のものと
 在、連絡と下へ。御手紙のま
 へ。お願ひ給へて。切手 十五
 巴谷下五五一。
 連絡先 〇五二四 津市新町千
 目目の一 三重県津市高等学内
 長谷部(宛)

かし大抵のつづつ、この老人に
 へ。お願ひ給へて。切手 十五
 巴谷下五五一。
 連絡先 〇五二四 津市新町千
 目目の一 三重県津市高等学内
 長谷部(宛)

徒の希望が合ひまつてタラシ
 で、関係団体留めからの連絡や
 でき、部員数が六、四〇生
 指摘もと基礎レーシングに

プライム形が同好会として
 設立したことを。インダハ
 の期刊にイブン種目ごとな
 るて、関係団体にもごとな

孝。

年度の入学試験受験者数は、まづとも、国立二期校は二〇名
の最良四名、同期校で
九六名の入浪一三名、公
 大等では云々の入浪四名
 立大学等は計して僅か六十名
 う入浪一〇三名の多きに違
 とおり手。
 金国様は、國体を逸えて
 要請で昨年、本校に懇々
 生まれまた。連日、男女部
 マラン、平均運動、実射
 欲をもちつゝますが、何
 で難航の高さうが、今
 を前期し手。距離は十
 度第一期の目的を射ぬい

興義藩主榎大壽勝
東雄藩主榎大命 第三位
・庫津 長谷川知生、佃先生
市川野子 全国シキング口位
白井輝子、市川野子、團団出島
・バスターボット 中川先生
生川(川先生)
興義生大倉壽勝

え、東には七名うち一人、一人名入には十八名うち一人、母名、阪大は九名うち一人、六名、名入は十七名うち一人、十一名、早稲田は十三名うち一人、三十三名、慶応は十三名うち一人、七名、等々といった具合で、地元の三軍に至つては興

の命に知らずの悲願は、大足は、足成るうにならぬに
足は、古来から人間役に
達され、特に現代社会の
自己、己を重んずる、精
の機軸のなない時代は非
たスボ、ッたと思ふ。ま
校のまた進学生多し学
その師匠大い、思ひま

は早速これにより人生